



TITLE:

爲替相場の暴落が國民の富に及ぼす影響について

AUTHOR(S):

江口, 巳與吉

---

CITATION:

江口, 巳與吉. 爲替相場の暴落が國民の富に及ぼす影響について. 經濟論叢 1934, 39(6): 868-888

ISSUE DATE:

1934-12-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130524>

RIGHT:

# 東京帝國大學經濟學會 經濟論叢

第六號

第三十九卷

昭和九年十二月一日發行

## 論叢

地方税としての酒税……………法學博士 神戸正雄  
社會的勢力の分析……………文學博士 高田保馬

## 時論

増税とインフレーション……………經濟學博士 小島昌太郎  
臨時利得税を論ず……………經濟學博士 沙見三郎

## 研究

經營信任會の構成に就いて……………經濟學士 大塚一朗  
アダム・スミスの貨幣價值觀……………經濟學士 岡橋保  
爲替相場  
の暴落が國民の富に及ぼす影響について……………經濟學士 江口巳與吉

## 說苑

貨幣量と銀行制度……………經濟學士 中谷實

## 附錄

新着外國經濟雜誌主要論題  
本誌第三十九卷總目錄

(禁轉載)

## 爲替相場の暴落が國民の富に及ぼす

### 影響について

江口 巳 與 吉

#### 緒 言

昭和七年以來圓の對外價値の暴落は我國の輸出をして世界市場を捲席せしめ、諸國は爲めに自己市場の擁護に腐心汲々として爲替ダンピング論、社會的ダンピング論を唱へてその政策の支柱となさむとさへする。國內に於ては輸出産業を起點として好景氣を出現を見、正にヴァルガの言ふ如く諸資本主義國中例外的地位を占めてはゐるが、之に對して或者は外國に唱へられるダンピング論を否定して現状を謳歌し、或者は勞働者階級の負擔に於てなされる價値の無償輸出の結果なりとして之を排せむとする。

思ふに諸説の紛々としてその認識及び判定を異にするは立場の相違に基く。而して問題は言ふまでもなく國民經濟に於て存し、判定は隨つて亦國民經濟の立場に於てなさるべきである。實は個人的立場に立つて事物を觀ながら國民的立場に立つと錯覺する多くの論者は問題とするに足ら

ない。國民經濟の組織が資本主義以外のものたり得ずとなす者は、安易な肯定論を導き出すが、本問題は寧ろ國民經濟組織としての資本主義の價值が吟味される一場合をなすのである。

かゝる立場より觀れば對外貿易は世界資本主義に於ける單なる財貨流通の現象ではなくて、國民の補足的富生成の過程に外ならない。たゞ商人の活動が自由なる限り、富補足の過程は自然的機構によつて遂行される。茲に問題が発生する。即ち圓の對外價值の下落は、一般に此の自然的機構の廻轉に對して大なる刺激となり、國內が特定の情態にある時は刺激は更に強大となる。殊に當局者に於て貿易の本質に關する明確なる認識を缺く時は此の機構の活動が總體目的に依つて適當なる規制を受け得ず、自然的廻轉は徹底的に行はれる。國民の立場に立つ限り、我々はかくて齎されたものを貿易に於ける國民の目的に照して判定せねばならない。本論文の目ざすところは、この事態につきその性質に關する解明並びに國民の立場よりする判定に外ならない。

この判定は補足的富獲得の爲めの提供財貨の價值量と調達された富の價值量との比較に基いて行はれる。随つて價值量の測定即ち評價が重要な問題となる。圓が對外通用をなす限り、對外收支對照が之によつて表現され、補足的富の價值量も亦之によつて測定される事は極めて當然ではあるが、然し問題の發生が抑々圓價下落による在內價值と對外價值との乖離に存する以上、この問題に關する限り、明かに圓は最早や信頼しうる價值尺度ではない。一般に多く平價に於ける圓の價值所謂金圓を用ゐるが、以下に於て述べる如く、爲替暴落時に於ける貿易の考察に當つては、

かゝる平面的評價が如何に無力なるかを知らうであらう。<sup>2)</sup> かゝる事態は全く後述の如き國際經濟の基本的構成、國際貨幣の機能の性質より生ずるものであつて、將に此の根據より、論理的に總體の目的に照してなす主觀的評價、いはゞ總體的評價の方法が要請されねばならない。我々は貿易に於ける非常の事態より此の方法を求めると至つたが、常時に於ても國民の立場よりなされる判定は必ず之に基かねばならぬ事を知る。

### 一、輸出貿易伸展の根據

最近の我國輸出の伸展の根據については、各々其の立場に従つて強調する點を異にするが、先づ購買資力の減退せる諸國民の需要狀態に適合する程我國の商品が低廉な事實による事は言を俟たない。而して生産費の低廉さは一方に於て生産力の特殊的事情による國民生活程度の一般的低級さに比して、經營上技術上即ち主として人的生産力の方面に於ける發展に基く一面も考へられるが、<sup>3)</sup> 而かも尙現在の問題に於て爲替下落の決定的な影響を看却する事は許されない。

現在の國民經濟組織にあつては爲替の下落は、國內の物價への影響の速度に段階的差異を生ずる事によつて、一般的に輸出増進の原動力となる。然しながら貨幣の在內價值が漸次對外價值に近づくに隨つて此の作用を失ひ、殊に我國の如く必要輸入品の許多なる場合にはこの作用の消滅速度は特に大なるべきである。然るに、我國の實際に於ては、在內價值下落の傾向は極めて微少

2) マルク暴落時の獨逸の飢餓輸出は、これに關する有力なる事例である。

3) 4) 前掲書 p. 224, 237.

5) 紡績業は此の代表的なものであらう。笠信太郎氏黃色商品進出の基礎（エコノミスト第12卷第10號）

6) 勿論全般的に貨幣の對外價值の高さまで下落して之と一致する場合は寧ろ少いであらう。かくて該國民經濟の享受する國際的分益隨つて國民經濟内の

にすぎない。即ち第一表に示す如く、輸入財貨は昭和八年半以降、明かに爲替下落の限度まで騰貴してゐるが、國內品物價は尙大なる開きを有し、若し軍需工業の活況による影響を控除すれば、殆ど影響の跡ありとは稱し難い。随つて、國內品物價の上に根據を持つ輸出品物價も亦、輸出量の激増に拘らず、當然示すべき數字より相去る事遠い。國內品物價と輸出品物價とのこの數字的關係は、爲替下落率まで輸出品物價が上らぬ點に於て輸入國の利得を示し、輸出品物價が國內品物價と大差を有する點に於て、輸出品の生産、輸出に携はる人々の利得を示すものなる故、何れにしても、現在までの輸出増進のモメントを示すと共に、將來の増進を約束するものである。

然らば國內財貨の上に於けるかゝる不感性の根據如何。この根據は一應は過剰生産手段、過剰商品の存在に求められる。蓋し一面、輸出増進は需供の關係より當然輸出品生産の基礎をなすところの國內諸財貨及勞力の價格を騰貴せしむべきに、之等の過剰狀態はその騰貴を妨げ、他面、輸入財貨は殊に我國の如く必要輸入品多き國に於ては急激に、廣範圍に亘つて、國內品物價の上に影響すべきに、勞働力並びに商品の過剰狀態が、その提供者の所得の増加を妨げる爲めに、彼等の生活は全般的には消費の節減を強要され、國內品に對する購買力の割當は減少せざるを得ないから、輸入品の騰貴は却つて逆に國內品下落の契機とこそなれ、殆どその騰貴の契機とはなり難い。畢竟國內經濟機構の痲痺狀態より起因して、國內品の騰貴は、輸入品の騰貴よりも、又輸出の増進よりも十分に齎され難いのが現實の事態である。換言すれば、國內の農村の層、資本主義

部の人々の享受する分益は修正されるであらう。今は之を問題としない。

第一表 爲替相場と物價との數字的關係  
三菱經濟研究所調査八〇種物價指數より作成

月	日	I 爲替相場			II 國內品		III 重要輸出品		IV 重要輸入品	
		對米指數 逆數	對英指數 逆數	左の平均	物價指數	Iとの差	物價指數	Iとの差	物價指數	Iとの差
昭6	月12	118	79	96	100		100		100	
昭7	日10									
	1 29	137	97	117	110	7	115	2	125	8
	2 27	143	103	123	110	13	117	6	129	6
	3 30	154	115	134	107	27	115	19	119	15
	4 30	150	116	133	104	29	109	24	117	16
	5 30	154	116	135	97	38	102	33	115	20
	6 30	162	122	142	98	44	104	38	117	25
	7 30	180	132	156	98	58	110	46	122	34
	8 30	202	143	172	100	72	141	31	161	11
	9 30	210	150	180	99	81	135	45	150	30
	10 29	215	150	182	99	83	137	45	155	27
	11 29	240	162	201	104	97	145	56	157	44
	12 27	240	162	201	109	92	147	54	158	43
昭8	1 30	235	165	200	108	92	142	58	159	41
	2 28	235	168	201	106	95	137	64	156	45
	3 30	230	165	197	105	92	130	67	158	39
	4 28	226	165	195	106	89	132	63	162	33
	5 30	206	168	187	106	81	138	49	170	17
	6 29	194	165	179	104	75	143	36	174	5
	7 31	173	165	169	116	53	151	18	186	17
	8 31	183	170	176	114	62	147	29	180	4
	9 30	183	173	178	115	63	143	35	180	2
	10 31	180	170	175	115	60	138	37	177	2
	11 30	165	170	167	116	51	131	36	174	7
	12 30	160	170	165	115	50	130	35	172	3
昭9	1 31	165	170	167	116	51	133	34	178	11
	2 28	165	170	167	118	49	134	32	179	12

(圓の對外價值と見做す)  
(一四品種平均)  
(一一品種平均)  
(一八品種平均)  
(四九、三七五弗一昭和六年中)  
(中〇・三七五d一昭和六年中)  
(二〇・三七五d一昭和六年中)  
(四九、三七五弗一昭和六年中)

〔備考〕 商工省官房13都市卸賣物價月報によれば、物價騰貴の傾向強きも、大體に於て同様な傾向を示す。

の層が痲痺状態にあるが故に、その周縁の細胞の活動が活潑となるのである。この状態が圓の内價值下落の微弱なる原因であり、随つて輸出伸展の原動力に外ならない。

而して此の事實は更に國民經濟の國際經濟に於ける生産社會としての性質にその發生の一般的根據を有する。思ふに國民經濟は「一體としての社會が自ら有する種々なる生産力を用ゐて總べての生産を行ふところの同一生産社會」を形成するが故に、一財貨の價值は他の諸財貨の其と有

機的關係を有し、生産技術の上に變化なしとすれば、他の諸財貨の價值より永く低位にあるを許さない。國際間に於ては事情は異なる。生産手段の自由移轉を許される共通生産社會に於ては、財貨の價值決定事情は比較的前者に近いが、生産手段の自由移轉を許さず、随つてその生産が全く相異なる社會的生產基礎に基づくところの各別生産社會間の生産物はその價值決定に於て相互間に何等有機的聯絡を有せず、價值は各々の事情によつてそれ自らの内に決定される。而して國際經濟に於て各別生産社會の範圍が支配的たる限り、國民經濟は大體に於て以上の性質を有すると稱しうるであらう。國際經濟に於ける國民經濟の生産社會としての性質、随つてその生産物の價值決定の事情は、以上の如くであるが、翻つて現在の我國國民經濟は前述の如き國民經濟組織の痲痺狀態なる特殊な事態の存在によつて、その生産物の價值をして著しく低價たる事を得しめる。いふまでもなく、現在の經濟組織の下に於ては、かゝる價值は輸出價格となつて始めて意識裡に上り來るが、而かも、以上の生産社會の價值決定法則が、その裏面に於て嚴存する。國民經濟の國際經濟に於ける此の性質、並びに我國國民經濟内の特殊な事情を顧み、爲管の暴落が如何に之等の基礎條件を活躍せしめるかを考へる時、始めて今日の我國に於ける輸出伸展の理解を完からしめるであらう。

## 二、國民の立場よりなせる判定

國民經濟はその生産物の價值に關して、大體に於て相互に有機的關係を持たない事は前述の通

8) 前掲書 P. 244-245.  
9) 同 P. 224.



りであるが、此の事は夫々の價值の間に同一性を缺き、随つて絶對的比較を許さない事となる。國際貨幣の介在による比較は貨幣の側より強制するものにすぎず、價值の相對性を失はしめる所以ではない。<sup>10)</sup> 故に、國民經濟間の財貨移轉は、交換の性質を具有し、然る限り貿易は國民の主觀的に認定せる價值と、實現された交換價格との差、即ち交換剩餘を標識として行はるべきである。茲に總體的評價の存在の意義が論理的に與へられる。随つて、前に述べた如く、國內に特殊の事情ある時は、主觀的交換價格は随時に増減すべく、従前より交換價格の低減を見る事あるも、必しも茲にダンピングありとは稱し難い。要するに世界資本主義に於ける財貨の流通も、國民の立場より觀察する時は財貨の交換として其の姿を示現し來り、之より生ずる剩餘の量如何が問題とせられるに至る。以下この論理の導くところに随つて、判定の歩を進めよう。

先づ第一に共通社會的生産物について考察する。この生産物は前述の如く價值決定に於て輸入生産手段と有機的關係を有し、價值に於て絶對的比較が可能であり、随つてその輸出は交換過程でなく、その價格は交換價格でなくて前述の論理は此の部分に當筈らないかの如く見えるが、然し之は主たる生産手段についてのみ言ひうるのであつて、今固有の生産手段の價值が重大な問題を生ぜしめるのであるから、兩者を各々區別して考察せねばならない。而して輸入生産手段をば、單に國內生産手段の生産力を引出す役目をするものと見て、この部分の經費（客觀的に決定される）の回收狀態如何、この生産手段に基き國內生産手段によつて生産された價值と交換價格

との關係如何を吟味しよう。一切の此の種財貨を検討する事は困難なる故に、最も重要な役割を演じ、而かもこの種財貨の典型をなす綿業製品について検討しよう。

第一に輸入生産手段であり、随つて客觀的な經費をなすところの棉花を問題とする。圓の對外價値の急激な下落ある時は、所有原料の十分な評價ありや否やが疑問となる。之に對しては棉花の原產地市場と我國内市場に於ける價格の比較をなせばよい譯であるが、我國の市場相場は普通前者より一圓餘低く、この數字的關係は常に正確に保たれるところであつて、常に手持棉花は爲替下落の限度まで騰貴した。而して紡績會社の使用棉花は全く國內市場に於て棉花輸入商を通じて供給される故に、棉花の原價は十分に綿製品を生産費中に評價されると見て差支ない。但し紡績會社の手持棉花多き場合、企業の立場としては値上りによる利得は大きい譯であるが、綿製品の輸出價格が騰貴せず所謂採算の不利な時も企業にとつては尙採算のとれる事があり得る。かゝる場合は明かに國民的立場よりすればダンピングであつて、第二表に示す如く若干かゝる事實かと思はれるものも見られるのであるが、採算上の波動は企業經營上避け難いところであつて、短期間の觀察より直ちに其と即斷するは危険の多い事と思ふ。然し、何れにしても採算が略プラスなる以上、輸入棉花の經費は、製品の原價中に大體は見積られてゐると思はれるのである。

以上は生産費の中に直接計算され、且つその主要な地位を占める生産手段に關してであるが、輸入せる機械其他に關しては、今茲に數字的根據を有しないが、爲替下落の程度に應じて償却を

原 價 計 算 表 (I)

布 (13lb)		細 布			二 巾 金 巾		
龍 C 時價	損益	綿業通 信に原 算に價	軍人 (時價)	損益	綿業通 信に原 算に價	紺千鳥 (時價)	損益
円 4.40	円 0.31	円 4.44	円 4.83	円 0.39	円 7.01	円 8.88	円 1.87
4.04	0.31	3.84	4.47	0.63	7.88	9.88	2.00
3.67	0.15	3.57	4.33	0.76	6.59	7.79	1.20
3.35	-0.09	3.47	4.13	0.66	6.45	6.34	-0.09
3.58	-0.08	3.68	4.21	0.53	6.75	6.44	-0.31
3.77	-0.12	3.68	4.29	0.61	7.03	6.59	-0.44
4.47	0.13	4.76	5.87	1.11	7.98	7.71	-0.27
5.13	0.56	4.60	5.91	1.31	8.32	8.18	-0.14
5.58	0.97	4.80	6.67	1.87	8.58	8.33	-0.25
4.98	0.80	4.32	6.04	1.72	7.90	7.50	-0.40
4.52	0.58	4.27	5.46	1.19	7.80	6.87	-0.93
4.32	0.50	4.09	5.21	1.12	以下二巾赤千鳥 7.56	6.32	-1.28
4.96	0.65	4.56	5.51	0.95	8.23	7.10	-1.13
5.89	0.64	5.74	6.36	0.62	9.88	8.54	-1.34
6.19	1.03	6.35	6.75	0.40	10.75	10.09	-0.66
6.33	1.07	5.82	6.61	0.79	10.54	10.95	0.41
6.90	1.31	6.21	7.52	1.31	10.57	12.75	2.18
7.04	1.65	5.97	7.56	1.59	10.22	14.56	4.34
6.85	1.26	6.11	7.45	1.34	10.41	14.59	4.18
6.53	1.23	5.87	7.15	1.28	10.17	12.63	2.46
6.17	0.90	5.93	6.99	1.06	10.32	11.03	0.71
6.98	0.78	6.01	6.54	0.53	10.37	9.72	-0.65
6.29	0.67	6.50	6.97	0.47	11.12	10.43	-0.69
6.63	0.27	6.80	7.37	0.57	以下二巾福壽草 10.74	12.68	1.94
6.62	0.14	7.35	7.74	0.39	10.82	12.59	1.77
6.68	0.40	6.85	7.54	0.69	10.48	12.43	1.95

て營まれる企業には、利潤減少の傾向ある故に一般にこの危険があるであらう。

間の富の移行を示すにすぎないが、利潤が小なる時は上述の結果を來すべく、輸入生産手段を以て營まれる企業には、利潤減少の傾向ある故に一般にこの危険があるであらう。

る。但し、利潤の絶対額が大なる時は原價計算の如何に拘らず、國民經濟にとつては、單に階級

なしてゐるや否や、寧ろ過當に低い評價を以て生産費を構成してゐるのではないかと想像され

爲替相場の暴落が國民の富に及ぼす影響について

第二表 綿 製 品

布	
剩 餘	剩餘の爲替 を考慮せる 原價に對す る比
	%
0.39	28.7
0.63	16.4
0.79	22.3
0.84	25.5
0.75	21.6
0.73	20.5
0.87	17.4
0.89	17.7
1.31	24.4
1.16	23.8
0.60	12.3
0.43	8.9
0.04	0.7
- 0.56	- 8.1
- 0.87	- 11.3
- 0.54	- 7.6
- 0.89	- 4.9
- 0.12	- 1.6
- 0.28	- 3.6
- 0.42	- 5.5
- 0.57	- 8.2
- 1.04	- 13.8
- 1.04	- 13.0
- 1.06	- 12.6
- 0.84	- 9.8
- 0.64	- 7.8

年月	綿 糸 20S				粗
	綿業通信 による原 價計算	損 益	金 魚 (時價)	ダイヤモンド 日報による原 價計算	損 益
昭 6					
7	119.84	16.84	136.68		4.09
8	104.56	14.64	119.20	105.00	3.73
9	95.12	14.62	109.74	107.57	3.52
10	91.76	7.08	98.84	88.70	3.44
11	99.72	6.77	106.49	94.13	3.66
12	108.41	1.18	109.59	99.61	3.89
昭 7					
1	133.38	0.76	134.14	128.90	4.34
2	141.04	4.87	145.91	132.13	4.57
3	145.08	1.17	146.25	139.85	4.01
4	126.96	4.74	131.72	122.62	4.18
5	123.37	1.00	124.37	116.57	3.94
6	117.29	2.25	115.04	120.52	3.82
7	137.92	10.21	127.71	132.29	4.31
8	177.54	20.92	156.62	172.38	5.25
9	191.13	17.75	173.38	187.13	5.16
10	170.17	3.17	173.34	165.56	5.26
11	182.27	18.05	200.32	174.46	5.59
12	171.50	26.22	197.72	168.71	5.39
昭 8					
1	178.00	21.37	199.37	175.72	5.59
2	169.45	10.36	179.81	164.34	5.30
3	171.35	14.09	185.44	168.44	5.27
4	169.19	9.76	1678.9	169.13	5.26
5	185.19	12.00	197.19	183.50	5.62
6	198.38	11.61	209.99	191.64	6.36
7	204.25	6.46	210.71	197.48	6.48
8	198.19	25.50	223.59	195.50	6.28

爲替相場の暴落が國民の富に及ぼす影響について

第三十九卷

八七七

第六號

一三五

製品原價計算表(2)

糸 20 <sup>s</sup>				細								
爲替を 考慮加工 費	爲替を 考慮加工 費	爲替を 考慮加工 費	金 魚 (時價)	剩 餘	原棉代	綿糸工 程に於 ける工 費	細布工 程に於 ける工 費	原價	爲替を 考慮加工 費	爲替を 考慮加工 費	爲替を 考慮加工 費	軍人 (時價)
円	円	円			円	円	円	円	円	円	円	円
25.00	119.84	136.68			2.67	0.919	0.85	4.44	1.77	4.44	4.83	
25.00	104.56	119.20		円 14.64	2.07	”	”	3.84	1.77	3.84	4.47	
24.51	94.63	109.74		15.11	1.80	”	”	3.57	1.74	3.54	4.33	
22.72	89.48	98.84		9.36	1.70	”	”	3.47	1.59	3.29	4.13	
20.14	94.86	106.49		11.63	1.91	”	”	3.68	1.55	3.46	4.21	
23.55	106.96	109.59		2.63	1.91	”	”	3.68	1.65	3.56	4.29	
28.73	137.11	134.14	-	2.97	2.99	”	”	4.76	2.01	5.00	5.87	
30.12	146.16	145.91	-	0.25	2.83	”	”	4.60	2.19	5.02	5.91	
33.33	153.41	146.25	-	7.16	3.05	”	”	4.80	2.33	5.36	6.67	
33.33	135.29	131.72	-	3.57	2.55	”	”	4.32	2.33	4.88	6.04	
33.33	132.15	124.37	-	7.78	2.50	”	”	4.27	2.36	4.86	5.46	
35.21	127.50	115.04	-	12.46	2.32	”	”	4.09	2.46	4.78	5.21	
36.00	148.92	127.71	+	21.21	2.79	”	”	4.56	2.68	5.47	5.51	
42.37	194.91	156.62	-	38.29	3.97	”	”	5.74	2.95	6.92	6.36	
42.10	208.23	173.38	-	34.85	4.58	”	”	6.35	3.10	7.68	6.75	
44.64	189.81	173.34	-	16.47	4.05	”	”	5.82	3.10	7.15	6.61	
49.01	206.28	200.32	-	6.96	4.44	”	”	6.21	3.47	7.91	7.52	
49.01	195.51	197.72	+	2.21	4.20	”	”	5.97	3.47	7.67	7.55	
49.01	202.01	199.37	-	2.64	4.33	”	”	6.11	3.40	7.73	7.45	
49.01	193.46	179.81	-	13.65	4.10	”	”	5.87	3.47	7.57	7.15	
48.07	194.42	185.44	-	8.98	4.16	”	”	5.93	3.40	7.56	6.99	
48.07	192.26	178.95	-	13.31	4.24	”	”	6.01	3.34	7.58	6.54	
44.44	204.63	197.19	-	7.44	4.73	”	”	6.50	3.28	8.01	6.97	
44.64	218.02	209.99	-	8.03	5.03	”	”	6.80	3.40	8.43	7.37	
42.37	221.62	210.71	-	10.91	5.58	”	”	7.35	3.00	8.58	7.74	
44.64	217.83	223.59	+	5.76	5.08	”	”	6.35	3.10	8.18	7.54	

爲替相場暴落が國民の富に及ぼす影響について

第三十九卷

八七八

第六號

一三六

第三表 綿

年月	綿		
	原綿代	加工費	加工費に 爲替を考 慮する 原價
昭 6	(綿業通信による)		
7	94.84	25.00	119.84
8	79.56	„	104.56
9	70.12	„	95.12
10	66.76	„	91.76
11	74.72	„	99.72
12	83.41	„	108.41
昭 7			
1	108.38	„	133.38
2	116.04	„	141.04
3	120.08	„	145.08
4	101.96	„	126.96
5	98.37	„	123.37
6	92.29	„	117.29
7	112.02	„	137.92
8	152.54	„	177.54
9	166.13	„	191.13
10	145.17	„	170.17
11	157.27	„	182.27
12	146.50	„	171.50
昭 8			
1	153.00	„	178.00
2	144.45	„	169.45
3	146.35	„	171.35
4	144.19	„	169.19
5	160.19	„	185.19
6	173.38	„	198.38
7	179.25	„	204.25
8	173.19	„	198.19

而して綿製品の輸出増進の契機は、第三表に示す如く、國內にて供給せられる生産手段を内容とするところの加工費に存する。この經費の不騰貴、寧ろ低落は、第一にいふまでもなく機械の新式、經營技術の優秀にあるであらう。即ち大正十四、五年頃は粗布一反の加工費は、二・八六圓<sup>13)</sup>を要したが、昨今は一、三三圓<sup>14)</sup>にすぎない。然しながら爲替の下落が、賃銀並びに國內一般物價に影響したとすれば如何であらうか。その結果は第三表の示す如く、實際に現はれた様な輸出價格を以てしては輸出不能なる生産費となるであらう。かくて、輸出増進の直接の契機は爲替下落が、加工費に作用を及ぼし得なかつた點に存するのであつて、設備經營、技術の優秀のみを強調する説は寧ろ政策的である。

然らば加工費に於けるこの状態は何を意味するか。加工費は大別して人件費と物件費に分れ、

12) 加工費は昭和六年半頃は綿製品價格中約35—40%を占めた。(粗布龍 C にて算計)

13) 綿絲製造工程に於ける加工費  $\yen 45 \times \frac{11.25}{400} = 1.26$

綿布製造工程に於ける加工費 計  $\yen 2.86$  (+)

其割合は六〇%弱對四〇%強である。人件費は大部分賃銀であるが、賃銀は名目賃銀に於て極めて微細なる下落の痕跡あるも、先づ不動と見てよく、小賣物價指數を考慮せる實收賃銀も亦若干の低落を示すけれども、此の限度の搾取を以て今日の輸出増進の最大なる拍車とは稱し難く、寧ろ、爲替下落に伴ふ一般的影響にすぎぬと見做すことが出來よう。かゝる意味に於て、輸出業に無關係な範圍の人々に比すれば相對的には寧ろ多少收益の分受に與るものとさへ稱しうるであらう。この事は他の輸出産業に携はる労働者についても同様にいひ得ると思はれる。随つて我々は輸出増進の根據を、労働者の生活資料の不騰貴に求むべきであり、而してその内輸入に俟つ資料は騰貴するのであるから、問題は國內生産品に關する。かくて、各別社會的生産の範圍に最奥の根據が見出されるが此の事は前述の論理的斷定を裏づけるものと思はれる。

國際貿易は現實には國際貨幣の介在によつて賣買の形態を採り、輸出は購買資力の獲得を目標とし輸入は購買資力の割當によつてなされるが、然し此事は貿易品の價值の性質を變へるものでなく、随つて貿易をして交換の本質を失はしめるものでない。かくて上述の論理的過程よりすれば、一定期間の輸出品と輸入品との對比を兩者の交換と考へ、その數量の對比を交換價格と見る事が大體に於て許されるであらう。但し、之には第一に貿易外の收支を無視してあるが、之は貿易上の收支と同様な爲替の影響を受けるものなる故、以上の考察より得られた結果に大なる修飾を與へるものでなく、第二に平面的な數量の比率が正確な交換價格とは稱し得ないが、而かも大

$$14) \quad \text{綿絲製造工程に於ける加工費} \quad \text{¥} 24 \times \frac{11.25}{400} = 0.67$$

$$\text{綿布製造過程に於ける加工費} \quad \text{計} \quad \text{¥} \frac{0.76}{1.30} (+)$$

體の傾向は窺ふ資料とならう。第三に今全輸出品について共通社會的生產品と各別社會的生產品とを嚴密に區分するは困難な問題であり、且つ後者が範圍に於て支配的なる故、一應輸出品の全部を各別社會的生產物と假定して考察を進めよう。さて、先づ第一に、輸出が國際貨幣に於て如何に評價されたか、第一表に示した如く重要輸出品の價格は圓價にて最高五〇%の騰貴を示してゐるが、圓價の下落を考慮に入れる時は當然示すべき數字とは尙三〇—四〇%の開きを有する。この事は、所謂輸出の増進にかゝらず、次表に示す如き實質的な對外購買資力の下落を結果する。

下落せる圓價にて評價

各月貿易額を第一表爲替平均指數にて除したる合計

昭和六年輸出額を一〇〇とす

	輸出	輸入	入超	輸出	輸入	入超
昭和五年	一、四六九、四四四	一、五五八	七	一、四六九	一、五五八	七
昭和六年	一、一四一	一、二三五	九	一、一三六	一、一三三	三
昭和七年	一、四〇九	一、四三二	三	八八〇	九五九	七九
昭和八年	一、九三三	二、〇七	全	一、七三三	一、〇七	四
						九四、四

正金銀行調査本邦貿易數量統計概觀によれば、輸出數量は昭和七年は一八%、昭和八年は三〇%を各々昭和六年に比して増加してゐるから、結局昭和六年に比して昭和七年は數量を約二〇%を増して購買資力の獲得を二〇%減じ、昭和八年は數量を三〇%増して、購買資力を五%減じたと見る事が出来る。然しながら、輸入商品の價格は同時に世界的物價下落の傾向に随つて、又、



輸入國爲替下落に基く輸出國の負擔に於て、一般的に下落の傾向を示す故に、輸出品對輸入品の比率を見る時は、前の數字程不利を示さない。即ち正金銀行貿易數量統計によれば輸出入の數量は

昭和六年		昭和七年		昭和八年	
輸 出	一〇〇	一一八・一	一三〇・三		
輸 入	一〇〇	九七・一	一〇二・四		

となるが、昭和七、八年は昭和六年に比して輸入超過を減じざるを以て、基準年と同様なる入超を示す様に修正して、比率を作製すれば次の如くなる。<sup>15)</sup>

昭和六年		昭和七年		昭和八年	
輸 出	一〇〇・〇	一一八・一	一三〇・三		
輸 入	一〇〇・〇	一〇一・五	一〇二・四		

即ち輸入財貨の絶對的數量は、大體に於て爲替の下落を見ざる年と同じく、之に對して輸出財貨は、昭和七年に於て二〇%、八年に於て三〇%増してゐる事となる。此の事は直ちに財貨の交換價格が二〇%—三〇%我國に不利となれる事を示すものと見る事が出来る。但しこの比率について一の修飾を加へねばならない。即ちこの比率は便宜上全貿易品について見たものであるが、前述の如く、この内に可なり少からぬ部分を占める共通社會的生産物が含まれてゐるのであつて、之は前に考察した様に、殆ど一〇〇對一〇〇の比率を示す故に、此部分を控除すれば、茲に掲げた交換價格は一層の惡化を示すこととなる。言ふ迄もなく貿易品の數量統計は極めて困難なる事に屬し、茲に利用せる統計の作成方法を吟味する事は出来ないが、たゞ、大體の傾向については、

15) 例へば昭和七年は基準年より67百萬圓の入超減を示す故、同年の輸入金額を1,468百萬圓とし、之より比例を以て輸入金額指數を出し、之を昭和六年平均單價指數118.9にて除すれば101.5を得。

以上の如く判斷して大過あるまいと思はれる。

爲替下落による輸出品の交換價格下落の傾向は以上に於て明かとなつたが、この傾向を昭和五年首の金本位復歸の際、圓の對外價值の上に於て、隨つて輸出品の交換價格の上に於て生じた強制的引上に對する一種の訂正と説明して直ちにこの狀態を肯定せむとする者があるが、圓の國際貨幣としての性質よりかゝる説明の妥當性は、大體認める事は出来るけれども、一方に於て圓の下落、國內物價不騰貴の傾向が金本位復歸前より更に甚しい事實は、この見解の必しも正しからざるを示し、他方に於て輸出品の價值が總體の立場より評價されねばならぬ事に注意すればかゝる見解は尙判定の一段階にすぎぬ事を知るであらう。

進んで國民のなす總態的評價が、國民經濟の事情によつて如何に變化すべきか、之を齎す諸契機と共に考察し行かう。

かゝる契機として第一に擧げらるべきものは、言ふまでもなく、賣捌き得ないで滯積する商品並びに休眠するところの生産手段の存在である。かゝる滯貨並びに休眠生産手段を以て生産された財貨に對して認定された價值は、必しも従前の價值と同等なるを要せず、寧ろ可なり低價にて、滯貨を一掃し、休眠生産手段を結合して作業せしめ、以て對外購買資力の絶對量を大ならしめるを國民經濟上有利となるであらう。殊に休眠せる人的生産手段は、生産力を發揮せしめれば、全く經費を要せずして全部的に國民經濟的に利得となるものなるを以て、かゝる生産手段の使用

に對する國民的評價は極めて低價たりうるであらう。失業より就業に入れる勞働者數は大工場には増加の見るべきものはないが、<sup>16)</sup>中小工業に於てはかなりの程度に達するものと思はれる。然しながら先に示した輸入財貨量が僅かに前年の量を維持するに過ぎなかつた事は、結局生産力の増進された部分が國際分益に何等與からなかつたのではないかと疑はれる。但し然らざればより一層輸入量を減少したかも知れぬと考へる事によつて、僅かにこの部分の無償輸出たらざりし事を慰めるのであるが、何れにしても大なる程度でない事が推測される。

更に亦、この觀點よりして輸出商品の評價が低くありうるとしても、再生産の可能な財貨と然らざる財貨とは同一の範疇に入れる事が出来ない。蓋し再生産の可能な財貨は上述の意味より價値を低く見積るとも、一時的に國際經濟より受くる分益を減するにすぎず、國民經濟の立場よりすれば、生産手段を休眠せしめおくよりは、多少の國際分益の享受に努める方が有利であるが、再生産の不能な財貨は必ずしも然らず。即ち第一に富源生産力は一切の國民經濟的生産の基礎なるが故に、之に基く生産物の評價は效能價值よりするも、商品價值よりするも寧ろ國民經濟百年の觀點に立つてなさるべく、必ずしも一時の購買資力獲得の大小を目標となすべきでない。第二に、國民的文化の所産、殊に古藝術品の輸出も相當あつた事は古美術海外流出法案によつて知りうるが、その國民的效能價值は、僅少なる購買資力獲得の爲めに拾値同様に安賣さるべきものではない。

16) 社會局工場職工異動調によれば昭和九年初は昭和六年末より約20萬人の就業増加を示す。

第二の契機として考へられるのは、爲替暴落の結果が保護關稅及び輸出獎勵金の作用を營むや否やである。爲替下落による輸入財貨の騰貴は、國內に於て競争品代用品の幾多の産業を蘇生勃興せしめ、便宜輸入品は殆ど全く驅逐され、必要輸入さへ其範圍を縮少せしめられた。然しながら今日の爲替の状態が永續せざる限り輸入を抑止する作用も一時的にすぎず、随つて此の間に其の基礎を確立し成熟の域に達しうる未熟産業に對しては、好結果を齎すであらうが、成熟の域に達する能力なき幼稚産業、又は老衰に至れる疲弊産業に對しては永く之を支へる事は出來ない。いふまでもなく、我國は由來富源生産力に乏しく、富源に依存する産業に關する限り産業幼稚期を脱する事が出來ず、或は殆ど成熟を見ずして直ちに疲弊期に入るものが少からぬ状態であるから、この種の産業に就いては爲替下落が基礎を確立せしめるとは稱し難く、寧ろ一時的なる保全關稅の作用を演ずるに過ぎない。随つてかゝる現象によつて保護關稅的作用を受けるものは、主として技術に依存する産業たるべく、所謂化學工業をその典型とする。此の種産業の内技術的に可なり程度に達しながら、外國企業のダンピングによつて脅かされてゐたものは之を保護さるべく、又技術的に一層の高級化へ進む可能性を與へられる故に、この意味に於て爲替下落の保護關稅的作用を十分に享受しうるものと云へよう。次に爲替の下落は、便宜輸出たると必要輸出たるとを問はず、輸出に拍車をかけ、世界市場を捲席してゐるが、之によつて將來確保しうる市場を獲得する時は、爲替下落は輸出獎勵金としての作用を及ぼしたこととなる。各國民の購買資力乏しき

階級及び植民地に向つて盛んに新市場を開拓しつゝある纖維工業製品及び其他の諸輸出品は、この作用を有効に受けつゝあると思はれる。要するにこの二作用を有効に及ぼす限り輸出財貨に對する主觀的價値は低下しうる。然しながら産業の基礎及市場の確保が必しも可能ならざる諸産業は、爲替による影響消滅の後も尙、新設擴張された生産設備を果して有効に利用しうるであうか。この兩二作用は本來意志的に實現さるべき政策の作用を自然的に招來せるものであるから、その效果の反面には大なる弊害の潛むと思はねばならぬ。

以上の二契機に對して輸出品に對する主觀的價値を高める契機がある。即ち嘗て獨逸國民の經驗せし如く、輸出の激増は國民の消費範圍を侵害し、所謂飢餓輸出を惹起す惧のある事である。殊に同一財貨にして輸出範圍と消費範圍とを有するものはこの傾向が強いであらう。この事は各別社會的生産物たると共通社會的生産物たるを問はず、貿易機構の自然性より發生するものであつて、國民的立場よりは、かゝる輸出品に對しては自己の用品を節して輸出する場合の高き主觀的效能價値を認めねばならぬ。唯、かゝる事象の發生は、輸出増進に應じて滞貨が一掃され、生産手段が悉く動員された後、尙新設生産設備の能力以上に輸出増進が續く場合にのみられるのであるから、現在の我國に於ては一般的には未だ此の危險ありとは稱し難く、隨つて用品としての高き效能價値を特に輸出品に認定する迄には至らない。但し、最近の三井物産による硫安輸出事件の如きは明かに之に妥當するものであつて、かゝる事例は詳細に之を調査するならば、決し

て少くあるまいと思はれる。

最後に、輸出財貨の交換價格の低落は、その限度だけの富が従前より多く海外に流出する事を意味するが、之は輸出産業の關與者に若干の富の沈着する事が刺戟となつて起る自然現象の結果にすぎない。此の移行せる富は實に國民經濟の、國際經濟よりの影響を受ける事最も薄き國內範圍より流出せるものに外ならない。勿論前に述べた如く、輸出産業に参加する勞働者と雖も、若干の搾取を免れないが、國內範圍の其に比すれば、尙僅少にすぎぬであらう。要するに今日の爲替暴落は國內範圍に生成せる富を國民經濟の周縁の細胞と、海外の消費者に移行せしめる事となる。今前者の中樞をなすものが、資本主義によつて搾取され盡した農村なる事に想倒すれば、この新しい富偏在の現象の輕視し得ぬ事を知るであらう。

以上を要するに我々は輸出品の交換價格が著しい程度に切下げられ、補足的富は大なる輸出量を以て尙前年の量を維持するにとどまる事を知つた。然し之を以て直ちに國民的投賣と解する事は出来ない。我々は輸出品の價值を低下する諸契機を有する——が、輸出獎勵金、保護關稅的作用在本來の之等政策の效果に及ばず、過剰なる商品並びに生産手段の存在による低評價を以てして尙補足的富の絶對量の上に寄與するところさへ僅少であり、他方國內の富の偏在の傾向に拍車を與へつゝある事に想ひ到れば、我が輸出貿易に投賣的性質の存在を否定し得ないのであるから。況や更に嘗ての獨逸國民の苦い體驗に迄は達しなくとも、富源生産力の安賣並びに飢餓輸出の途を進みつゝあるではないか。

## 結 語

以上の判定に於て補足的富に對する需要的價值如何、更に最大購買資力を得べき輸出價格如何等の重要な諸前提が與へられなかつた爲めに的確なる判定は得られなかつたが、而かも元來國際經濟に於て富の分配を受ける事薄き我國が、更に分益享受を伴はざる國際分業負擔を重ねゆく傾向は以上に於て大體窺ふ事を得ると信ずる。この事態は世界資本主義の動きの結果として生じたものであるが、之を國民の立場より見る時は、貿易機構の自然性に根因を有すると稱しうる。茲に國家の聰明なる統制策が要請される。南米諸國がその重要輸出品の輸出に當つて、爲替相場を公定して以て輸出價格(交換價格)の維持に努め、世界市場の狀態を顧みつゝ徐々に爲替公定を廢止した方策は、<sup>18)</sup>以上の意味に於て興味深いものである。

以上の判定に於ける諸基準は、總體的評價が行はれる限り常に依據さるべきものであるから、一應之に基いて判定を試みる事は當然ではあるが、然し現實の國民經濟の狀態を前提してその適用をなすところに、この判定の抽象性があり、形式的にすぎぬことが示される。之にとゞまる時は過剰生産手段、過剰商品の存在は多々益々輸出品の國民的低評價を可能ならしめるであらう。即ち貿易機構のみを意志的に改めても尙低評價を許すであらう。我々は國民經濟の本質を顧みる時この低評價を國民の實質的な總體的評價として許容する事を得るであらうか。勿論否である。かくて貿易に對する判定より單に貿易機構の批判にとゞまらず、低評價の根因をなすところの國內經濟狀態の考察に、このものはやがて資本主義そのものゝ批判にまで進まねばならぬであらう。